

# (4) 誠実に明るくいふ

## 良心と向き合おう

こうしようと決めたとき、

「本当に、それでいいののか。」

と問いかける心の声が聞こえませんか。

自分の気持ちをごまかして行動しようとしたとき、

「それは、いつわりのない気持ちか。」

と問いかける心の声が聞こえませんか。

それが、良心の声です。

自分の良心に、真つすぐ向き合い、

誠実に行動できているでしょうか。

ふり返って考えてみましょう。



## 「誠実である」と「まこと」と

「誠」の意味を

調べると……

### まこと【誠】

① 誠実でいつわりのない心。  
素直で真面目な心。

② 本当のこと。  
うそやいつわりのないこと。

「誠実」の他に、「誠」が付く言葉には、  
どのような言葉があるでしょう。

その言葉には、どのような意味があるのでしょうか。

至誠にして動かざる者は  
いまだこれ有らざるなり

吉田松陰

(思想家、教育者)

\*真心をもって対すれば、動かすことが  
できないものはない。

自分に誠実でないものは  
決して他人に誠実であり得ない

夏目漱石

(小説家)

# 明るく楽しい毎日を過ごすために



あやまちや失敗は、だれにでも起こることです。そのときに、つい、その場しのぎでうそを言ったり、ごまかしたりしてしまうことがあります。

しかし、その場しのぎが、問題の本当の解決につながるのでしょうか。

このような言動は、周囲の信頼を失わせるだけでなく、自分自身に後悔を残し、やがては、自分自身を責め、とがめることになるのではないのでしょうか。

こうしたことを乗りこえるために大切なことを考えてみましょう。

## 話し合ってみよう

### いつわりのない誠実な心をもつために

いつわりのない誠実な心をもちたい。そのためにはどのようにすればよいか、自分自身をふり返って考えてみましょう。

自分の心の中にある

誠実で真面目な気持ちに従って行動することは簡単なことではない。

● どうしてうそをついたり、ごまかしたりしてしまうのかを考えて書きましょう。

● 誠実に行動するためにはどのようにすればよいかを考えて書きましょう。

でも、それを乗りこえたときの気分は、とても晴れやか。





毎日の生活の中にある「便利さ」を当たり前だと思っている私たち。それはどのようなように生まれたのだろうか。

## 好奇心から 何かが生まれる

● 生活の中にある便利ながどのようなきっかけで生まれたのかを調べてみましょう。

こんな便利なこと

どのようなきっかけで生まれたのか

● 「あったらいいな」を実現するためのアイデアを考えてみましょう。

こんなことあったらいいな

実現のためのアイデア

# (5) 進んで新しいものを求めて

## 好奇心が出発点



空を飛ぶ鳥を見上げて

「自分も空を飛べないか？」と考えた人がいる。

——そこから始まったあくなき探究が  
できそうなことを可能にした。

一本の針金を手にしてながめ  
ある日、ひらめいた人がいる。



——そこから広がったやわらかな発想が  
今の私たちの生活に生きている。

出発点は好奇心だった。



他人から吸収することで  
学んではかりいと  
自分からは積極的に  
物事を考えなくなる。

池田菊苗  
(一八六四～一九三六)  
化学者

小さな感動が、大発見につながった  
ある日食べた昆布だしを使った湯豆腐のおいしさに感動した池田菊苗は、この味のもとには、昆布が関係しているのではないかと考えた。  
そこで、大量の昆布だしをにつめたり、化学薬品を加えたりするなど、いろいろな方法でこの味の正体をつき止めようとした。  
様々に実験を重ねた末、ついに、約三十八キログラムの昆布をにつめて、「レীগルタミン酸ナトリウム」を取り出し、これが、おいしさのもとであるということを発見した。  
それまで味覚成分としては、「甘味」「酸味」「塩味」「苦味」が知られていたが、これらとはちがう第五の味として、このおいしさのもとを「うま味」と名付けた。

# 新しいものを求めるようになり

古いものを残しながら型を破っていく

歌舞伎役者の十八代中村勘三郎は、江戸の世話狂言から上方狂言、時代物、新歌舞伎とどんな役でもこなすことができる名優だった。

勘三郎は歌舞伎のすばらしさを広めたいという夢の実現のために、若者が多く集まる渋谷の劇場で歌舞伎を演じたり、平成中村座を立ち上げ、欧米で自分たちの作った現代歌舞伎を演じたりした。

勘三郎の挑戦は、だれもが親しめる娯楽という本来の歌舞伎の姿を取りもどすことにつながった。



古典を守ることは大切。  
それと同じくらいに  
新しい挑戦が必要だ。

十八代中村勘三郎  
(一九五～二〇一)  
歌舞伎役者



人のことをせんさく  
するのをやめて、  
もっとアイディアに  
好奇心を向けなさい。

マリー・キュリー  
(一八六七～一九三四)  
ポーランド出身の物理学者

不思議な物質の正体を知りたかった

マリー・キュリーは、ピッチブレンドというウランをふくんだ鉱物から、強い放射線を出す物質に興味をいだき、一体、この物質は何だろうと、夫と共にその鉱物を何トンもくだいてはなべでにるという作業をくり返した。そうして取り出されたO・一グラムの物質はラジウムと名付けられる。

ラジウムは当時、戦場で傷を負った兵士たちの治療に役立ち、今でもがんの治療などに使われている。

## 考えよう工夫しよう 求め続けよう

私たちに、知りたいことや工夫したいことがたくさんある。

生活の中で思い付いたことを、素通りしないで考えてみよう。あなたが何かを生み出すきっかけが、そこにある。



中谷宇吉郎は、雪の研究で世界的に有名な科学者である。

宇吉郎が、まだ若いころのことである。

ある朝の新聞に「アメリカの最新式除雪車が、日本の雪に動けなかった」という記事があった。それを読むうちに、日本とアメリカの雪のちがいに興味をもち、自分で調べてみたいと思った。また、あるとき、山形県で雪のため枝が折れ、一晩のうちにサクラランボの樹が全滅した話を聞いた。

「昨日の雪は、いつもより重かったんです。これで三、四年は収穫ができない。どうしたらいいのだろう。」

という農家の人のなげきに、このような雪が、どんなときに降るのが分かれば、枝折れの予防をすることもできるだろうにと考えた。

そんなある日、宇吉郎は、ベントレーという人の写真集を手にした。いく種類もの雪の結晶が三千枚ものっているものだった。

(何と美しい結晶だろう。自然の中に花がさいたようだ。)

宇吉郎は、息をのんで見入った。

このことがきっかけとなり、前から心にかけてながら延び延びになっていた雪の研究を、本格的に始めようと決心したのだった。

(日本に降る雪の性質を研究したなら、雪の害を防ぐだけでなく、これを利用することもできるかもしれない。それにはまず、雪そのものをよく見ることから始めよう。)

宇吉郎は、札幌にある大学の研究室の廊下で、窓を開け放って研究を始めた。降っている雪を、ガラス板の上に受けて顕微鏡でのぞいてみると、そこには水晶細工のような雪の結晶が見えた。宇吉郎は、写真とはちがった美しさに心を打たれるのだった。

さらに、零下十五度の十勝岳でも観測をした。雪の結晶には、六角状や六角柱などの様々な形が見られた。また、気温や水蒸気の量が変わると、雪の結晶の形もいろいろに変わってくるのが分かってきた。

このような様々な雪の結晶を調べた結果、結晶の形と天候との関係も少しずつつかめてきた。

そこで、宇吉郎は、いろいろな状態の中で雪を作ることができれば、その結晶の形から上空の気象の様子が分かるかと考えた。そして、何度も失敗をくり返しながら、上空と同じように水蒸気の温度や量を調節できる小さな実験装置を、何とか作り上げたのである。

もっと難しかったのは、実験装置の中に、雪の結晶になる核を用意することだった。雪の結晶は、空中にうかんでいるちりや氷を核にしてできる。だが、小さな装置の中を上空に近い条件にする方法は、なかなか考え出せるものではなかった。

「小さな箱の装置では、やはり無理ではないでしょうか。」  
研究室の仲間が言った。



中谷宇吉郎  
(一九〇〇〜一九六二)

除雪車  
積雪の多い地域(ちいき)で  
雪かきを行う車。



しかし、宇吉郎は考え続けた。そして、装置の中に糸をつるして空にうかんでいる状態にすれば、糸を核にして雪の結晶ができるかもしれないと考えた。

最初、木綿糸をつるしてみた。だが、糸全体にしもが付き、ちょうど毛虫のような形になってしまった。羊の毛やくもの巣などもためしてみたが、どれも同じようなものだった。

そんなとき、研究室にうさぎの毛皮を着こんでいる仲間がいて、

「どの糸も駄目なら、うさぎの毛はどうかなあ。」

と、つぶやいた。何げない一言だったが、宇吉郎は聞きのがさず、願いをこめて装置にうさぎの毛を取り付けた。

「ああっ、できた。雪の結晶だ！」

宇吉郎は思わずさげんだ。一本のうさぎの毛に数か所、雪の結晶ができたのである。顕微鏡で調べたところ、うさぎの毛には、所々にこぶのあることが分かった。

「そうか、このこぶの部分が氷でおおわれ、そこに雪の結晶ができるんだ。」

宇吉郎と研究室の仲間は、代わる代わる顕微鏡をのぞき、かたをたたき合った。

その後、雪の研究は進み、大雪や重い雪の降る予想がつくようになった。そして、交通や農作物の被害の対策も立てられるようになったのである。

宇吉郎は、ある夜、真つ暗な庭に出て、懐中電灯を空に向けて見た。遠い遠い空のかなたから、数知れない白い雪が限りなくまい降りてくる。耳をすますと、空でサラサラという音を立てているような気がした。この雪の一つぶの結晶が、上空の気象状態を教えてくれるはずである。

(雪の結晶は、天から送られた手紙のようだ)と、宇吉郎は思うのだった。



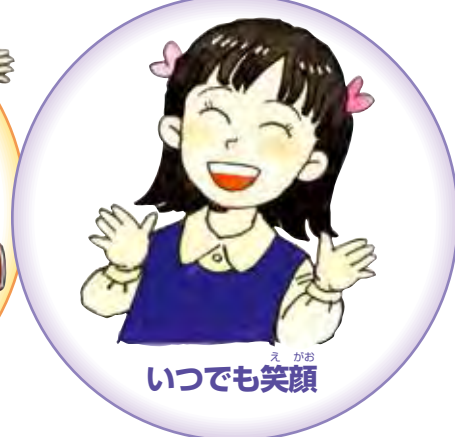
友達がいっぱい



ねばり強い



だれにでも親切



いつでも笑顔

## 自分の良い所を見つけよう

●自分の良い所を見つけてみましょう。周りの人にも聞いてみましょう。

私が見つけた自分の良い所

(さんから

(さんから

(さんから

## (6) 短所を改め、長所をのばして

### 自分らしさつて

### 何だろう

自分の中にある

あんな良い所、

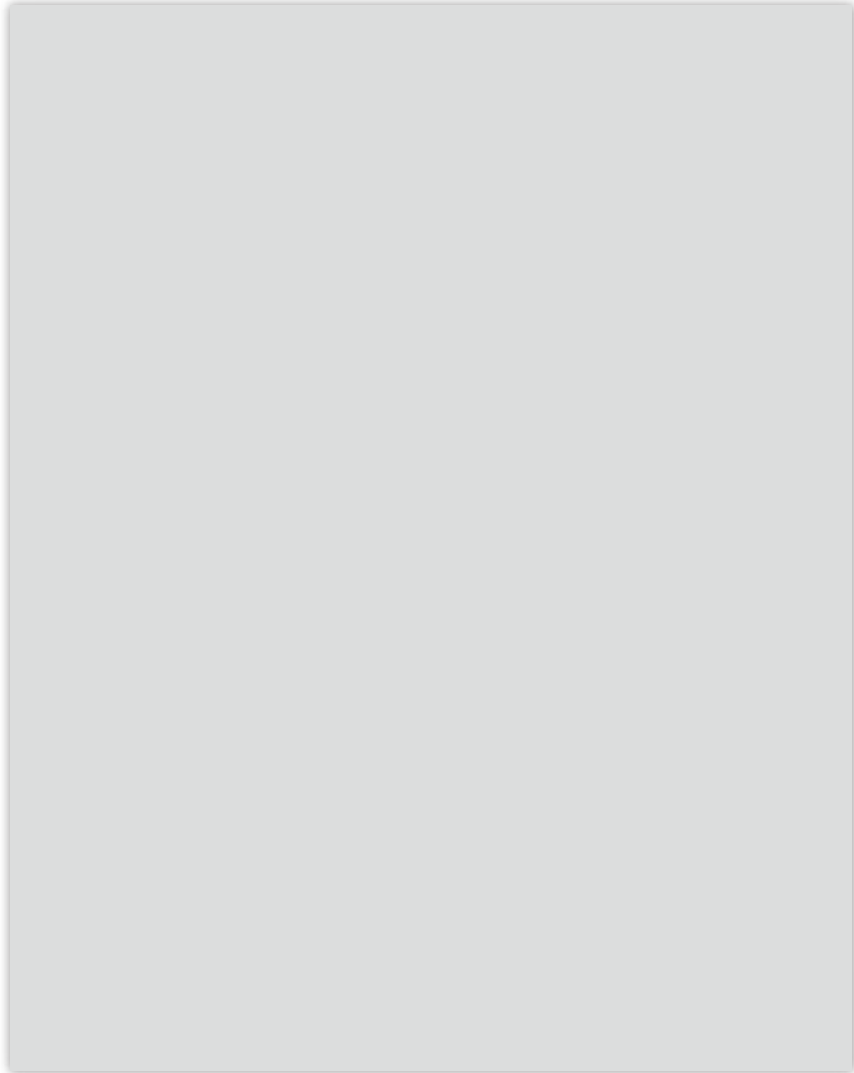
こんな良い所。

それを見付け、

のばしていくことで、

自分らしさが

もっともっとみがかれていく。





自分の「良い所」も「変えたい所」も、自分が成長していくために大切な所。あなたの力で、あなたはもっと自分らしさを発揮して変わっていきけるはず。周りの人や友達の見も聞いてみましょう。

## 自分らしさを発揮して



## こんな自分を変えたいな

私の変えたい所

もったかがやくために

私の良い所

もったかがやくために

●自分の「良い所」や「変えたい所」を考え、自分らしさをもったかがやくせるためにはどうすればよいかを書きましよう。

玉みがかざれば光なし  
『礼記』による

他人が自分よりすぐれていたとしても、それは、はじめではない。しかし、去年の自分より今年の自分がすぐれていないのは、立派なはじめなのである。  
ラポック  
(イギリスの探検家)